

2024年4月21日 第3主日礼拝 午前10時

聖書 ハガイ2章1-9節 説教 「強くあれ」

今日はハガイ2:1-9から「強くあれ」と題して2つの点でみことばを取り次ぎます。

### 1. 強くあれ 1-5

ハガイ書は、神殿再建の励ましを中心とした、約4か月の短期間に語られたハガイの預言が記されています。ハガイは全部で4回の預言をしていますが、今日の箇所は2回目の預言です。1回目の預言では、18年間神殿工事が中断している中で、自己中心の生活を神中心の生活に改めて、神殿工事を再開するように励ましました。ユダヤ人はハガイを通して語られた主のことばに聞き従い、3週間後に神殿工事を再開しました。それから約1カ月が過ぎようとした時に、ハガイは2回目の預言を行いました。

「1第七の月の二十一日に、預言者ハガイを通して、次のような主のことばがあった。」第七の月の二十一日は、ユダヤでは7日間続く仮庵の祭の最終日でした。民は1週間仮庵の祭を祝いました。仮庵の祭では、出エジプトをしたイスラエルが、荒野で仮庵、すなわち仮小屋に住んだことを覚え、7日間仮庵を作ってそこに住みます。また短い秋の時期に持たれる仮庵の祭は収穫祭でもあり、収穫物を神に感謝します。一方で、1章で見たように、当時は収穫は多くはありませんでした。さらに神殿工事が進むにつれ、自分たちの建てている神殿が、ソロモンが建てた以前の神殿に比べるとあまりにも質素で、がっかりする人も出て来ました。そのような時にハガイは民を励まし、仮庵の祭が明ければ、心を強くし、仕事に取りかかれという主のことばを語ったのです。「2シェアルティエルの子、ユダの総督ゼルバベルと、エホツァダクの子、大祭司ヨシュアと、民の残りの者に次のように言え。」ハガイは、政治的指導者総督ゼルバベルと宗教的指導者大祭司ヨシュアとユダヤの民全員に主のことばを語りました。その内容が3節以降です。

「3あなたがたの中で、かつての栄光に輝くこの宮を見たことがある、生き残りの者はだれか。あなたがたは今、これをどう見ているのか。あなたがたの目には、まるで無いに等しいのではないか。」ソロモンが建てた神殿がバビロン軍によって破壊されたのが前586年でした。そしてハガイの預言によって神殿工事を再開したのは66年後の前520年です。ですから、民の中の70歳以上の人は、子供の時に見た、以前の豪華な神殿を覚えていました。ソロモンが建てた神殿は、それはそれは豪華な建物でした。ダビデは生前、神殿建設に必要な資材をたくさん準備しました。そしてソロモンはレバノンから大量の杉を輸入し、石を切り、金銀青銅鉄などを用い、神殿と豪華な装飾品を作り、目を見張るほどの豪華な神殿が完成しました。その神殿を覚えている人たちが、以前の神殿と今建てている神殿を比べました。そして、現在建築中の神殿があまりにもみすぼらしく、無に等しいと思ひ、がっかりしたのです。そして、そのような落胆の思いが、以前の神殿を知らない人たちにも影響を及ぼし、再建工事のやる気を失わせる原因となっていたのです。

それに対してハガイは言いました。「4aしかし今、ゼルバベルよ、強くあれ。—主のことば—エホツァダクの子、大祭司ヨシュアよ、強くあれ。この国のすべての民よ、強くあれ。—主のことば—仕事に取りかかれ。」「しかし今」とは、ユダヤ人の沈んだ心を方向転換させ、奮い立たせる転換点となる言葉です。そして次に三重の「強くあれ、強くあれ、強くあれ」という励ましを、ゼルバベル、ヨシュア、すべての民に語り、彼らの弱っていた心を励ましました。そして、「仕事に取りかかれ」と言って、仮庵の祭が明けたら、再び神殿の仕事に取りかかるようにと励ましました。しかし、弱い者にただ「強くあれ」と言っても、根拠がなければ強くなれません。そこでハガイは強くなれる理由を伝えました。それが4節後半です。「4bわたしがあなたがたとともにいるからだ。一万軍の主のことば—」主が共にいることを主の臨在と言います。この主の臨在の約束は1回目の預言でも語られました。その約束を再び思い出させたのです。

さらに主の臨在の約束の根拠を5節で伝えました。「5あなたがたがエジプトから出て来たとき、わたしがあなたがたと結んだ約束により、わたしの霊はあなたがたの間にとどまっている。恐れるな。』主の臨在の約束は、シナイ山における神と民との契約においてイスラエルに与えられました。出エジプト29:45-46にはこうあります。「わたしはイスラエルの子らのただ中に住み、彼らの神となる。彼らは、わたしが彼らの神、主であり、彼らのただ中に住むために、彼らをエジプトの地から導き出したことを知るようになる。私は彼らの神、主である。」神がイスラエルのただ中に住むという臨在の約束を、ハガイは「わたしの霊はあなたがたの間にとどまっている」という主のことばによって民に伝えました。「わたしの霊」とは神の霊、すなわち聖霊のことです。聖霊が彼らの内にとどまっていることによって、神が彼らと共におられるのです。だから「恐れるな」と言い、主の臨在が「強くあれ」という励ましの根拠だと伝えたのです。

私たちが当時のユダヤ人のように、比較することでがっかりしたり、失望したりすることがあります。過去と現在の状況を比較するかもしれませんが、自分は以前はもっとできたのに、今はできないと思うかもしれません。また周りの人と自分を比べるかもしれません。周りの人と比べて自分はだめだと落ち込むかもしれません。他人と自分を比較することで私たちは時には優越感を持つこともあれば、逆に劣等感を覚えることもあります。しかし、比較からは何も良いものは生まれません。あれこれと比較しようとする私たちに対して、神は「しかし今」と言って、心の方向転換をするように語られます。そして「強くあれ、仕事に取りかかれ、わたしがあなたがたとともにいるからだ、恐れるな」と私たちに励まされるのです。私

私たちは新しい契約によって、聖霊が私たちの内に住み、主が私たちと共におられるという祝福をいただいています。ですから、私たちはあれこれと比較するのではなく、主の臨在を信じ、みこころにかなうことを、心を強くし、恐れずに行っていきましょう。

## 2. これから後の栄光 6-9

6-9節は将来に対する預言の箇所です。ここには間近に起こることとやがて救い主が来られる時のことが預言されています。まず6-7節前半「6まことに、万軍の主はこう言われる。『間もなく、もう一度、わたしは天と地、海と陸を揺り動かす。7a わたしはすべての国々を揺り動かす。』」「天と地、海と陸を揺り動かす」は、通常は自然界における異変や災害を意味します。けれども7節で「わたしはすべての国々を揺り動かす」とあるので、ここでは歴史の中で神が直接介入され、奇跡的な方法によって神が働かれることを預言しています。まず間近に起こることが預言されます。

「7b すべての国々の宝物がもたらされ、わたしはこの宮を栄光で満たす。一万軍の主は言われる—8 銀はわたしのもの。金もわたしのもの。一万軍の主のことば—」これは現在再建している神殿に必要な物はすべて満たされるという神の約束です。エズラ記5-6章を見ると、神殿工事を再開するとユダヤ近辺の支配者たちが妨害にやってきました。その中には総督タテナイという人がおり、名前のごとく「神殿はタテナイ」と妨害を始めました。それに対してユダヤ人は、自分たちはペルシャのキュロス王に命じられて神殿を建てていると言ったため、タテナイたちは、現在の王ダレイオスにそのことを確認してほしいとの手紙を送りました。ダレイオス王はその手紙を読み、文書保管所を調べさせました。すると以前キュロス王が書いた文書が見つかったのです。そこには「エルサレムに神殿を建てること、その費用は王家から支払われること、バビロンに運ばれた神殿の器はみな返して、元の場所に戻すこと」が記されていました。そこでダレイオス王は総督タテナイたちに対して王の命令を送りました。そこには「ユダヤ人によって神殿を再建させること、その費用を間違いなく王の収益から支払うこと、さらに神殿が完成した後は、必要なささげ物を毎日滞りなく彼らに与えよ」と記されました。その結果、当時世界を支配していたペルシャの財宝が、エルサレムにもたらされ、再建された神殿に主の栄光が満ちました。神は反対者の訴えを用いて歴史の中に介入され、奇跡的にペルシャ王を動かし、神殿の必要を満たされたのです。

「金はわたしのもの、銀はわたしのもの」と主は言われます。神は私たちを通してご自分のみこころを行われる時、必要を満たしてください。まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます」というみことばは、昔も今も真実なのです。波崎キリスト教会も教会堂建設の時には、教会員が献金し、教会債を募り、銀行からお金を借りました。そして、会堂建設後返済を始めました。感謝なことに予定より早く返済することができました。そしてその後、パイプオルガン購入、隣の土地と牧師館購入と続きましたが、すべて必要が満たされ、返済もみな予定より早く終わりました。神は私たちが主に信頼して働くなら、必要を満たしてください。それは私たちの個人生活でも言えることです。ですから、必要を主に祈りつつ、私たちのなすべき務めに励んでいきましょう。

次の9節は救い主の時代の預言です。「9 この宮のこれから後の栄光は、先のものにまさる。一万軍の主は言われる—この場所にわたしは平和を与える。一万軍の主のことば。』」なぜ「この宮のこれから後の栄光は、先のもの、すなわちソロモンが建てた神殿にまさる」のでしょうか。それはこの時に建てた神殿に、救い主イエスが来られるからです。ソロモンが建てた神殿を第一神殿と言います。そしてこの時ゼルバベルが建てた神殿を第二神殿と言います。イエスが来られた時は、第二神殿完成から500年後です。その時の神殿はヘロデ大王が拡張工事をした豪華な神殿となっていました。それは拡張された第二神殿でした。そこに神の栄光そのものである救い主イエスが来られたのです。その結果、「この宮のこれから後の栄光は、先のものにまさる」という預言が成就しました。イエスの弟子たちは豪華な神殿を見て驚きました。しかし、イエスはこの神殿はやがて壊されると預言しました。その預言は70年のローマ軍による神殿破壊によって成就しました。

その結果、神殿はなくなりました。しかし、イエスが与える平和は永遠に残りました。平和の君イエスは十字架で死んで、すべての人の罪を贖い、神との平和を与える救いを成し遂げてくださいました。イエスが十字架で死なれた時、神殿の至聖所の幕が上から下まで真っ二つに裂けました。それは、イエスが神への生ける道を開いてくださったことを表しています。「この場所にわたしは平和を与える」とは、イエスが成し遂げられた神との平和を表していたのです。

だれでも救い主イエスを信じるなら、すべての罪が赦されて、イエスが造られた神への生ける道を通して神のもとに立ち回り、神との平和をいただくことができます。そして神との平和をいただいた人は、神のくださる平安を心に持つことができます。人生には様々なことが起こり、時には心が動揺することもあるでしょう。けれども、神が共におられ、すべてのことを働かせて益としてくださることを覚えるとき、心の平安をもって歩むことができます。そして神は私たちを平和の福音を宣べ伝える者としてくださいます。さらに、隣人との間の平和、社会の中での平和をつくる者として用いてくださるのです。ハガイが励ました神殿再建工事は、やがて来られる救い主イエスの時代に向かう準備でもありました。そのことを当時の人は知らなかったでしょう。私たちも今自分がしていることの意味をすべて知ることはできません。しかし、神のご計画の中で、神が私たちを用いておられることを覚えましょう。そして、強くあれとの励ましをいただいて、神が私たち一人ひとりに与えられた務めに取りかかりましょう。